
IS 《インフィニット・ストラトス》 ~蒼き閃光の覇者~

ツバクロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス
IS 蒼き閃光の覇者

【Nコード】

N8946R

【作者名】

ツバクロウ

【あらすじ】

女性にしか使えないという『インフィニット・ストラトス』を動かしてしまった男が二人居た。

一人は『織斑オリムラ 一夏イチカ』。
そしてもう一人は『瞬刀シュントウ 燕ツバメ』。

この二人がIS学園に入学し様々な戦いを繰り広げていく

感想まっています。

プロローグ（前書き）

作者には文才がありません。

原作に似せて書きますが、オリジナル要素が多いです。

ネタなども入るかもしれませんが、ご了承ください。

連載しなくなるというのは避けれるようがんばります。

プロローグ

どこまでも澄み切った青い空、日差しが良いせいかわかかわかという擬音が良く合う陽気な日だ。

そんな中、ここIS学園で、二人の生徒が別々の場所で校内を全力疾走していた。

「はあっ、はあっ、…も、もう追ってこないよな」

彼の名は『織斑 一夏』。
ここ、IS学園の生徒だ。

一夏が全力疾走をしていた理由は

「居たわ、織斑君よ！」

「や、ヤバイッ！」

「あれ、もう一人は？」

「そんなことは今いいでしょ、それよりも織斑君を確保よ！」

「うわああああ!!!」

一夏は現在、学園の生徒達（大半の女子）に追われている真っ最中であつた。

ちなみにもう一人の方はというと

「だあああ、何で追ってくるんだよ！そんなに男子が珍しいのか！

「？」

『もちろん！！！！』

「ハモるなあ！」

一夏とは別に追われている生徒の名は『瞬刀 燕』。

一夏と燕は藍越学園の入試試験の会場で迷子になり手当たり次第に扉を開けていたすえ、ISを見つけた。

その部屋にISは二機おいてあり、それぞれが出来心で触るとISが起動してしまったのだ。

それを駆けつけた人に目撃され、二人は適性試験を受けることとなったのだ。

そして今現在、二人はIS学園の生徒となった。

「くそつ、数が多すぎる！」

「瞬刀君、そろそろ諦めて降参したら？」

「だれがつ！」

戦闘中とも思える会話の中、燕の目の前に一夏が現れた。

「燕！？」

「一夏！？」

「燕、こっちはまずい」

「俺の方だっってもう」

二人が会話をしているうちに前と後ろから挟まれるような形になってしまった。

「ふっふっふ、もう逃げられないよ、織斑君に瞬刀君」

「どうする燕…」

「どうするって、この状況じゃ手も足も出ないぜ」

「だよなあ」

一夏が肩を下ろすと同時に授業開始の予鈴が鳴り響く

「もう休み時間終わり!？」

「急がないと授業に遅れちゃう!」

二人を囲んでいた女子生徒達は急いでクラスの方へ帰って行った。

「た、助かった〜」

「おい一夏」

「なんだ？燕」

「今の、予鈴だよな」

「ああ、それがどうか　　!?!」

「俺たちも早く戻るぞ、山田先生ならまだしも、次の授業は千冬姉

だからな」

二人は一瞬青ざめ、大急ぎで教室へ戻った。

登場人物紹介（前書き）

人物紹介です

あくまで可能性ですが、新キャラが追加されるかもしれません

登場人物紹介

1) 瞬刀 燕 しゅんとう しばめ

一夏と同じく、男で世界初のIS起動者

一夏と篤とは幼なじみで三人一緒に剣道場へ通っていた。

専用機は蒼牙 そうが

2) 織斑 一夏 おりむら いちか

男で世界初のIS起動者

専用機は白式 びやくしき

3) 篠ノ之 篤 しののへ たくみ

燕と一夏の幼なじみ

専用機は紅椿 あかつばき

4) セシリア・オルコット

イギリスの代表候補生

専用機はブルー・ティアーズ(蒼い雫)

5) 鳳 鈴音 ファン リンイン

中国の代表候補生、燕と一夏とは幼なじみ

専用機は甲龍(シェンロン/こうりゅう)

6) シャルロット・デュノア

フランスの代表候補生

専用機はラファール・リヴァイヴ・カスタムII

7) ラウラ・ボーデヴィツヒ

ドイツの代表候補生

専用機はシュヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）

8) 織斑 千冬
おりむら ちふゆ

一夏の姉であり、担任でもある

第1回 I S 世界大会総合優勝および格闘部門優勝者
モンド・ケロツン

I S を装備していない状態で I S の武器を使いこなすなどその実力は健在

9) 山田 真耶
やまだ まや

一夏のクラスの副担任。日本の元代表候補生。

10) 篠ノ之 束
しののたはね

篝の姉であり、I S の発明者でもある。自称「天才」

篝・一夏・千冬・燕の4人だけに関心を持つ（呼称はそれぞれ「篝ちゃん」・「いつくん」・「ちーちゃん」・「つつくん」）

11) 五反田 弾
ごたんだ だん

一夏と燕の中学時代からの悪友。実家は食堂を営んでいる。

12) 五反田 蘭
ごたんだ らん

弾の妹。有名私立女子校に通っている中学3年生で、生徒会長。

13) クラリツサ・ハルフオーフ

ドイツの I S 配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』副隊長。
専用 I S は『シュヴァルツェア・ツヴァイク』

14) ナターシャ・ファイルス

アメリカのテスト操縦者

専用 I S は『銀の福音』
シルバリオスベル

15) その他の生徒・人物

16) みかみ三上 ひかり光

近所に住む女の子、燕達の幼なじみの一人

燕と光の両親が元同級生

幼なじみの中でも束のことが一番好きらしい

まだ小学生（四年）だが、とても小学生とは思えない行動力を見せるときがある

登場人物紹介（後書き）

追加しますた！

自己紹介(前書き)

プロローグよりも前からのスタートです

自己紹介

「全員それってますね、それではS H Rを始めます」
ショートホームルーム

副担任の山田先生が教室に姿を現し、S H Rを始めようとする。
先生の自己紹介は済んでいる）

「それではまず、自己紹介から始めたいと思います」

（自己紹介か、自分の番が来るまで暇なんだよなあ）

燕がそんなことを考えていると、一夏を呼ぶ声がした

「……君、一夏君、織斑一夏君！」

「は、はいつ!?!」

（あんなに大声出さなくてもいいだろ）

少々頭を抱えながら燕はため息をつく

「あのね、自己紹介、『あ』から始まっています『お』なんだよね、自己紹介してくれるかなあ、だめかなあ」

「いや、あの、そこまで言わなくても」

一夏は周りの視線を気にしながら席を立つ

「織斑一夏です。よろしくお願いします。…うっ!?!」

クラスの女子は『もつと聞きたいなあ』という期待の目をしていて、その視線から助けを求めるように篝の方を見るが目をそらされてしまった

(…それが六年ぶりに再会した幼なじみの反応かよ、そつだ、燕なら！)

篝が駄目ならと燕に助けを求める視線を送るが、篝同様、目をそらされてしまった

(悪いが一夏、ここは自分の力でがんばってくれ)

(燕もかよ、俺は嫌われてるのか?)

一夏は少し寂しい気持ちになるがすぐに気持ちを切り替えて次の言葉を考える

(幼なじみは助けてくれない、だが、ここで黙ったままだと暗いやつのレットルを張られてしまう、だったら解決策は一つ！)

一夏は息を吐き、大きく吸い直す

クラスの女子と先生がその行動にハッとするが、一夏の答えは

「以上です！」

ガターンッ！！！！

見事にクラスの生徒（燕と箒以外の生徒）がこけた

その様子を見た一夏が動揺していると、一人の女性が一夏に近づき出席簿でしばく

「いつてー！、げっ 関羽！！」

パン！

すごくいい音が教室に鳴り響く

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

燕は聞き覚えのある声を聞きハツとなり思わず声を上げてしまっ

「千冬姉、なんでここに！？」

ザクッ！！

燕の頭に出席簿が刺さる

「学校では織斑先生だ、馬鹿者！」

刺さった出席簿の角は想像以上に痛かった。

「織斑先生、もう会議は終わってたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてしまっただけで済まなかつたな」

「おいおい、俺と一夏に対しての『あの』声はどこに行ったんだ!？」

「で?お前はまともに自己紹介もできんのか!」

「いや、千冬姉、俺は」

「パン!」

一夏、五分もたたず、本日三度目の出席簿アタックをくらう

「学校では織斑先生だ」

「:はい、織斑先生」

二人のやりとりを見ていた生徒達がざわつき始めた

「織斑君つてもしかして千冬様の?」

「それじゃあ、男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して?」

「それなら彼の方はどうなるのよ」

「いいなあ、織斑君と代わりたいなあ」

一体最後のは何だったのだろうか、まあ、それは無視しとして

「ええい静まれ!次の自己紹介者は、燕だったな、早くやれ時間がない」

「は、はい！」

慌てて席を立ち、自己紹介を始める

「瞬刀燕です。趣味は読書と釣りです。よろしくお願いします！」

無事に自己紹介を終えた燕は席に着く、それからしばらくSHR
終了のチャイムがなった

幼なじみと一週間の猛勉強宣告

「あー、……」

まずい、非常にまずい

一時間目のIS基礎理論授業終わり今は休み時間になっていた

一夏と燕はクラスの女子はもちろんのこと、他クラス・他学年の生徒までもが

ここ、一年一組に集まってきているのだ

…理由？それはもちろん一夏と燕を見たいからである

(全く、ここは珍獣動物園かよ。さっき一夏を助けなかったから話しづらいんだよな)

燕がふと一夏の方を向くとなにやら箒に呼ばれているを見つけ

燕の視線に箒が気付いたらしく『お前も来い！』みたいな視線を送ってきた

(は、箒のやつめ何で俺まで巻き込むんだよ、まあこの空間に居るよりはマシか)

それから箒に連れ出された二人は屋上まで来た

……一時間、いや一分とたったところか

とにかく、それぐらいの沈黙があった気がする

そして、その沈黙を破ったのは一夏だった

「そういえば」

「何だ？」

一夏は何かを思い出したらしく、話を切り出した

「去年、剣道の全国大会で優勝したんだってな、おめでとう」

（一夏、それは何か間違っていないか？）

その言葉を聞いた篤は少し黙るが、すぐに

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「いや、新聞に載ってたし」

「なんで新聞なんて読んでるんだ」

（待て篤、普通に考えて新聞を読まない学生がどこにいる！？）

中には読まないという人もいるが、そのことは別の話になるので触れないでおこう

「あー、あと」

「なっ、何だ!？」

また何か言われると思ったらしく、すごい剣幕でこちらをにらんでくる

一夏は全く気付いていないが、燕は気付いたらしく一歩下がってしまった

何も気付かず、一夏は話を続ける

「久しぶり、六年ぶりだけど、篝ってすぐにわかったぞ」

『え……』

予想していなかった言葉が来たため、燕と篝の言葉がかぶる

「ほら、髪型一緒だし」

「よ、よくも覚えているものだな……」

「いや、忘れないだろ、幼なじみのことぐらい」

「……………」

ギロリと燕が睨まれた

(なぜに俺を睨む、篝さん!)

どういう事だ、フォローでもしろってのか!?

燕は頭をかきながらようやく口を開く

「箒、俺からも言わせてくれ、久しぶり」

「ああ、久しぶりだな」

なんとか箒の不機嫌を少しは解消したみたいだが、まだ何かあるよう
うで

一夏が口を挟んできた

「そついえば箒、今度の休みは暇か？」

「え、何でそんなこと聞くんだ」

「いや、久しぶりにこの三人で遊びに行こうかなって」

『……………』

箒は燕に寄っていき一夏に聞こえないよう話をする

「おい燕、一夏はいつもこんな感じなのか？」

「ああ、いつもこんな感じで場の空気を読まないで居る」

「そんなことで今まで暮らしてきたのか？」

「まさにその通りだ、女子に告白されてるのにそれを遊びの誘いと勘違いしたり

ゲームの話をしていたら他のゲームの話に勘違いされたり、…まだ

あるが聞くか？」

「いや、もういい」

篤は少し頭を抱えるがすぐに平常心を装始めた

実際、話をしていた燕が一番辛かったことは誰も知らない

「とにかく、俺の苦労が無かったらどうなっていたことか」

「よく耐えたものだな」

篤が労いの言葉をかけると同時に予鈴がなる

それから三人は教室へ戻った

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。

しかし、一夏は話について行けない様子だった

（お、俺だけか、俺だけなのか？教科書に書いてあることがわからないのは、

このアクティブなんちゃらだとか、広域うんたらとかどういう意味なんだ？）

一夏は少し困った様子をしていたので燕が先生にばれないよう話しかける

「おい一夏、どうしたんだ？」

「お前はわかるのか？この授業の内容」

「授業の内容って、ISに決まってるだろ」

「そんなことは分かってるよ！！」

「パン！」

つい大声を出してしまった一夏に織斑先生の出席簿アタックが炸裂する

「どうしたんだ一体」

(千冬姉、それ聞く前に一夏の頭たたいちや駄目でしょ)

燕が少々あきれている内に話が進んでいた

「今の様子だと分からないところがあるらしいな」

「は、はい」

「どこだ？」

「え、えーっと」

少しとまどいながら一夏は覚悟を決めたらしく

「ほとんど全部、分かりません」

「ぜ、全部ですか!？」

声を上げたのは山田先生だった

「今の段階で分からないという生徒はどれくらい居ますか？」

山田先生の質問に、誰も手を挙げるものは居なかったらしく

燕の方を見てくる

「俺はだいたい分かります」

「そうですか」

少し残念そうな顔をしたのは気のせいだったのだろうか

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「あの分厚いやつですか？」

「そうだ、必読と書いてあっただろ」

「えーと、電話帳と間違えて捨てました」

パァン!

一夏が出席簿アタックをくらうのを見て燕は

(なんか一夏がわざとやってるように見えるきた)

簿も同じようなことを思ったらしく誰にも聞こえないため息が二つ
した

「あとで再発行してやるから一週間で覚えろ」

「えっ！？あの厚さを一週間ではちょっと」

「やれと言っている」

まるで蛇に睨まれた蛙のごとく、一夏がおとなしくなった

「俺も手伝ってやるから頑張れよ」

「ああ、ありがとな燕」

それからしばらくして授業が終了した

クラス代表決定戦開始宣言

休み時間、俺と一夏が話をしていると後ろから不意に声をかけられた

「ちょっと、よろしくて?」

「ん?何か用か?」

珍しく、燕と一夏の声が八もった。

それに対し声をかけてきた少女はわざとらしく声をあげる

「まあ!なんですよ、そのお返事。わたくしに声をかけられるだけでも光栄なので、

それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら?」

『……………』

このタイプの女子は正直言って苦手だ

燕も一夏も親がおらず、こつこつ金に困らない裕福な家というのは憧れであり、憎らしくもあった

しかもお嬢様口調は燕にとって一番腹の立つ口調だった

一瞬返答に困ったが先に口を動かしたのは一夏だった

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

その言葉には燕も同意見だった

「わたくしをしらない？このセシリア・オルコットを？」

イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

一夏がその言葉を口にしたとたんクラスの大抵がずっこけた

「あ、あ、あ、……」

「『あ』？」

「『飴』のことらしいしぞ」

「そうなのか！？」

「違います！それよりも、あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

一夏が顔を戻すとそこにはすごい剣幕をしたセシリアがいた

「おう。知らん」

「……信じられませんわ、極東の島国には常識というものが無いの

かしら」

「バカを言うな、俺と一夏はこの学校に入れられるまでISには興味が無かったただけだ」

「それでも一応勉強するのが普通ではなくて？」

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ」

「お前さあ、言葉聞いただけで想像できなかったのか？」

「そついわれればそつだな」

簡単すぎて見落とすやつっているんだな…

「そつ！エリートなのですわー！」

エリート気取りってのはどうしてこつイライラするのだろうか

「まあエリートといっても、入試で唯一教官を倒したわたくしはエリート中のエリートですから」

「唯一教官を倒した？」

燕は唯一という言葉に反応した

「そうですね、それがなにか？」

『俺も倒したぞ』

「またもハモった」

「あれ、一夏もか」

「燕も倒したつて、初耳だぞ」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってことだろ」

ピシッ　　と、何かにヒビが入る音がしたが気のせいだろ

気のせいにしたところでチャイムがなる

この時間はクラス対抗戦に出る代表生を決めるために授業はカットされた

「誰か立候補者はいるか？」

織斑先生があらかじめ説明した後、立候補者は出てこなく

ついには推薦者を集めるようになってしまった

そんな中一人の生徒が推薦者の名前を挙げた

「はい、織斑君がいいと思います」

「えっ！？俺え！」

思わず立ち上がった一夏をみて苦笑いをした燕にも

「なら、私は瞬刀君を推薦します」

「なっ！？俺じゃなくて一夏で充分だろ！」

「お前幼なじみを売る気か！？」

クラス全員の頭に『一体どこに？』という疑問が浮上したが

そんなことも気にせず後ろの方から声上がる

「納得いきまっせんわ！」

机を思いっきり叩いて立ち上がったのはセシリアだった

「ほう、お前は納得がいかんのか」

「もちろんですわ！普通は実力のあるわたくしがクラス代表になるのは当然のことです！」

「それならここにいる全員が納得のいく方法があるぞ、決闘すればいい」

千冬がその提案をしたとき、クラス全員が納得した

「たしかに決闘なら実力も見られるしね」

「誰もが納得いくよね」

「おもしろい、俺は乗るぜ!!」

燕が笑みを浮かべ、千冬の案に乗ってくる

「俺もだ、四の五の言うよりわかりやすい」

燕に続き一夏も乗ってくる

「わたくしも構いませんわ!」

セシリアも乗ってくるが、負けるわけが無いという表情をしている

「話はまとまったな、それでは勝負は一週間後の月曜日の放課後、第三アリーナで行う!」

千冬は予定表にそのことを書き込むと、燕と一夏に

「織斑・瞬刀の両名は専用機について説明があるから、この後職員室まで来るように」

「専用機?」

一夏が疑問を口にすると

「そうだ、お前達にはデータ収集のため、特別に専用機が与えられることになっている」

その瞬間、クラスがざわつき始める

「こんな時期に専用機だなんて」

「いいなあ」

「そのことを聞いて安心しましたわ!」

『うおっ!』

突然二人の目の前に現れたセシリアに対しすこし引いた様子を見せた

「さすがにあなた方は訓練機でわたくしだけが専用機というのは力の差がありすぎですから」

「安心しろ、お前に専用機を使わせるつもりは無かった」

「なんですって!?!」

燕の挑発にセシリアが怒鳴りを上げる

「だってそうだろ、訓練機と専用機じゃ試合は目に見えている。だったら、お互い訓練機で勝負するのがフェアってもんだろ」

「くっ、……」

セシリアは返す言葉が見つからず黙ってしまっ

沈黙が訪れる前にチャイムが鳴り、授業が終了する

専用機の説明と部屋割り(前書き)

昨日は更新出来なくて済みませんでした

専用機の説明と部屋割り

IS学園職員室、ここに一夏と燕が来ていた

「なあ一夏、専用機ってどんなのが来るんだろうな」

「さあな、でもかつこいいのが良いよな」

二人が話をしていると、千冬が資料を持ってきた

「これが二人に与えられる専用機の資料だ」

「へえ、近接格闘型『蒼牙』か」

「『白式』か、ってあれ、燕と機体がかぶってないか!？」

「なに!?! 本当だ、どういう事だ千冬」

ガッツ!!

出席簿が手元に無いため、千冬の拳が燕の脳天に炸裂する

「っ!!」

「…声がまともに出てないぞ、燕」

「学校では織斑先生だと何度言わせるつもりだ」

「すみません」

「それよりも機体が同じってどういう事ですか？」

燕の質問を一夏が代弁する

「ああ、上の話と同じ機体の方がデータが取りやすいとの事だ」

「……まあ、カラーリングが違うから良いけど」

燕はため息混じりに諦めた様子を見せた

「ああ、そうそう言い忘れるところだった」

「なんですか、織斑先生」

「武器は二人とも刀が一振りだけだからな」

『……はっ！？』

「ちよっ、なんで刀だけなんですか！」

「それも一振りだけ！」

「私が無理言っつてそうさせてもらった」

「せめてハンドガン位は装備させてくださいよ」

「じゃあお前は二種類の武器を扱えるのか？」

「えっと」

「弾道スピードによる距離の取り方、急零停止、アブソリュートターン、
まだまだあるが、それら全てを使いこなせるのか？」

『す、すみません、出来ません』

燕が質問したはずなのに一夏までもが反応してしまった

「分かればいい、それでこれが部屋の鍵だ」

「あれ、一週間は自宅からって聞いてますけど」

「俺もだ」

「事情が事情だからな、保護もかねて寮に変更したんだ
一ヶ月もすれば部屋が用意される、それまでは相部屋だ」

「それは良いですけど、荷物は一度取りに帰らないと」

「そのことも安心しろ、私が手配しておいた」

「俺の方ですか！？」

声を上げたのは燕だった、彼の両親は事故で亡くなっており

親戚もいないので、正真正銘の天涯孤独の身だった

「もちろんだ」

「部屋の鍵は!？」

「以前お前の両親に預かったものを使用した」

「……、そうですか」

「わかったら部屋に行け」

『失礼しました』

二人は職員室から出て寮へ向かった

「ここか」

一夏と燕の前にある扉には『1025』とかかれてあった

「じゃ、俺はこの上の『925』だから」

「おう、また後でな」

燕は一夏と別れ、自室へ向かった

「そついえば何で俺と一夏の部屋が別なんだ？」

そんな疑問を浮かべながら部屋へ入った

燕がベッドに腰を下ろすと下から木が割れる音がしたが気にせず

そのまま眠りについた

専用機の説明と部屋割り（後書き）

ようやく一日目が終了！

……こんなペースで良いのだろうか（汗

あと、燕の部屋の番号はあまり気にしないでください

決闘当日、一週間の出来事

「よう燕」

決闘当日、朝飯を食おうとしていた俺に一夏が声をかける

「今日だな」

「ああ、試合前には専用機も届くらいから何とかなるだろ」

「おはよう、二人とも」

燕と一夏が話していたら後ろから箒が現れた

『……………』

「…どうしたのだ」

「いや、何とというか」

「この一週間のことを思い出して」

「……………」

箒は無言で二人から目をそらした

『目をそらすな！！』

「まったくこの一週間、剣道しかやってないってどういふことだよ」

「仕方ないだろ、お前達のISはまだ届いていないのだから」

「だからってなんでISの説明を省いたんだよ」

「……………」

『だから、目をそらすな！こっちを向け！』

奇跡的なハモリがあったところで時間は約一週間前に遡る

IS学園食堂

「なあ箒」

「何だ？」

「ISの事教えてくれ！」

「断る」

「このままじゃ燕はともかく俺は負けるかもしれないんだ」

「ちょっとまで、なぜ俺はともかく扱いなんだ!？」

「俺ISの知識皆無だから」

「…聞いた俺がバカだったよ」

燕があきれていると不意に後ろから声をかけられる

「君たちって、噂の子達でしょ」

『？』

俺と一夏が声の主を見るとどうやら三年生の用だった

「そっなんじゃないですか？」

燕が適当に返事をする

「私がISについて教えてあげようか」

まさに助け船だと、燕と一夏は思い

『はい、ぜ』

「結構です。この二人には私が教えることになっていますので」

二人が返事をしようとしたとたん箒がそれを遮り

何を言うかと思えば自分が指導すると言ってきた

その言葉に燕と一夏の口が開いたままで啞然としていた

「あなたも一年生でしょ、私三年生だから」

それに対し箒は少し眉間にシワを寄せながら

「私は、篠ノ之束の妹ですから」

あまり言いたくないような口調でしゃべり

三年生はおとなしくどこかへ行ってしまった

「…教えてくれるのか？」

一夏は確認するように箒に聞いた

剣道場

竹刀のぶつかり合う音が道場内に響く

「どういふことだ」

「いや、どういふことって言われても」

ギャラリー満載の中、一夏は箒にやられていた

ちなみに燕は箒と同時に胴を決め、引き分けになっている

「どうしてそこまで弱くなっている!？」

「受験勉強が忙しかったから、かな？」

「……………中学では何部だった」

「自宅警護部、三年連続皆勤賞だ!」

「まあ、俗に言う『帰宅部』だな」

「燕は！」

「俺は一年の時だけの剣道部だな」

「なぜやめた」

「一夏がないんじゃないや張り合いがなくてな、退屈だったんだよ」

燕が頭をかきながら渋々喋る

「
なおす」

『へっ？』

「すまない筈、もう一度言ってくれないか？」

「鍛え直す！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間、私が稽古をつけてやる！」

「ちょっとまで、俺たちはISについてをだなあ」

「だからIS以前と言っているだろ！燕はともかく一夏は全然駄目だ！」

「仕方ないだろ、一夏は中学全部ダラダラと過ごしてきたんだ」

「残り二年は燕も同じだろ！」

「…スゲエ、否定はしないんだな」

「とにかく、二人とも鍛え直す！」

『理不尽だあ！！』

そんなこんなで一週間

燕と一夏は放課後三時間

筭の特別メニューをくらうこととなった

そして時間は戻り決闘が行われる放課後となった

本編外 ISの説明

ISの設定

正式名称「インフィニット・ストラトス」。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、束が引き起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能に宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。

ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。

その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。

ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。

ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。

ISは自己進化を設定されていて、戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、IS自らが自身の形状や性能を大きく変化させる「形態移行」を行い、より進化した状態になる。

コアの深層には独自の意識があるとされていて、操縦時間に比例してIS自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりISの性能を引き出せるようになる。

ISには謎が多く、全容は明らかにされていない。

特に心臓部であるコアの情報は自己進化の設定以外は一切開示されておらず、完全なブラックボックスとなっている。原因は不明であ

るがISは女性にしか動かせない（唯一の例外が織斑一夏）。コアを製造できるのは開発者である篠ノ之束のみであるが、ある時期を最後に束はコアの製造をやめたため、ISの絶対数が467機となり、専用機を持つ者は特別扱いされることが多い。コアの数に限りがあるため新型機体を建造する場合は、既存のISを解体しコアを初期化しなくてはいけない。

ISの世代

第1世代

兵器としてのISの完成を目指した機体。
現在はほぼ退役している。

第2世代

後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代。

現在最も多く実戦配備されている。

第3世代

操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代。

未だ実験機の域を出ない。そのためか、（鈴の甲龍のように燃費の向上に重点を置いたものもあるが）どの機体も燃費が悪く、新たな課題となっている。

第4世代

装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指した世代。

展開装甲や自動支援装備が標準装備されている。

各国が未だ第3世代機の実験段階にある現在では、篠ノ之束が直接設計・開発した「白式」・「蒼牙」・「紅椿」の3機しか存在しない。

IS 関連

IS スーツ

IS を装着する際に基礎となる衣装。衣装自体がカスタマイズされている物もある。

専用機はIS スーツが量子変換された状態でIS に登録され、IS を起動させると自動的に服装がスーツと入れ替わるがエネルギーを消費してしまうため、スーツを着用してからIS を展開するのが一般的である。

パッシブ・イナードナル・キャンセラ
PIC

IS の基本システム。これでIS は浮遊・加減速などを行うことができる。

アクティブ・イナードナル・キャンセラ
発展形に第3世代兵器AICが存在する。

ハイパーセンサー

IS に搭載されている高性能センサー。

操縦者の知覚を補佐する役目を行い、目視できない遠距離や視覚野の外（後方）をも知覚できるようになる。

コア・ネットワーク

IS のコアに内蔵されている、データ通信ネットワークのこと。

広大な宇宙間での相互位置確認・情報共有のために開発されたシステム。

現在は操縦者同士の会話として、オープン・チャンネルとプライベート

ート・チャンネルが利用されている。

最近の研究で、「非限定情報共有^{シェアリング}」を行い、コア自身が自己進化していることが判明している。

シールドバリアー

操縦者を守るためにISの周囲に張り巡らされている不可視のシールド。

攻撃を受けるたびにシールドエネルギーを消耗し、模擬戦などではエネルギー残量が無くなった場合負けとなる。

また、シールドバリアーを突破するほどの攻撃力があれば操縦者本人にダメージを与えることができる。

絶対防御

全てのISに備わっている操縦者の死亡を防ぐ能力。

シールドバリアーが破壊され、操縦者本人に攻撃が通ることになってもこの能力があらゆる攻撃を受け止めてくれるが、攻撃が通っても操縦者の生命に別状ない時にはこの能力は使用されない。

この能力が使用されるとシールドエネルギーが極端に消耗される。

ワンオフ・アビリティー（単一仕様能力）

ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する固有の特殊能力。

通常は第二形態から発現する。それでも能力が発現しない場合が多い。

パッケージ（換装装備）

パッケージを追加するには拡張領域が必要になる。

単一で全ての状況に対応することを目的に開発された第四世代機の白式と蒼牙と紅椿用の物は存在しない。

オートクチュール

専用機だけの機能特化専用パッケージ。

各機体の特性に合わせた様々な装備が追加される。

IS専用機

主に国家代表操縦者および代表候補生や企業に所属する人間に与えられるIS。

最初からパイロットの特性がコアに入力されているわけではなく、「初期化」「最適化」（合わせて一次移行）を経て、専用機としての性能を発揮する。

また、ISそのものが量子化することができるため、普段は待機形態と呼ばれる形で持ち運びされている。

さらに、ISの装甲を部分的に展開することも可能。
機体カラーは特記する他は基本的に機体名を踏襲している。

訓練用IS・量産型IS

うちがね
打鉄

純国産の第2世代型IS。

性能が安定しており、使いやすい。

鎧のような形態をしている。機体カラーは黒色。

ラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）

デュノア社製の第2世代型IS。

「ラファール・リヴァイヴ・カスタムII」の原型で、操縦しやすく汎用性が高い。

外見上の特徴は、ネイビーカラーをした4枚の多方向加速推進翼。

亡国機業のIS

アラクネ

オータムの第2世代型IS。

経路は不明だがアメリカから強奪した機体。

背中に8つの独立したPICを展開している装甲脚を備え、蜘蛛を模した異様な容姿をしている。

機体カラーは黄色と黒。装甲脚には砲門が装備されている。

学園祭で「白式」と「蒼牙」を強奪するために使用されるが、戦闘で追い詰められた際にオータムがコアを抜き、自爆させる。

再びコアを装甲に馴染ませるのに時間がかかるため、再起不能状態に陥る。

サイレント・ゼフィルス

エムの第3世代型IS。

経路は不明だがイギリスから強奪した機体。

BT兵器搭載ISの2号機で、シールド・ビットを試験搭載している。1号機のデータが基盤となっている。

機体カラーは（ブルー・ティアーズよりも濃い）青色。

武器

スターブレイカー（星を砕く者）

BTエネルギーと実弾の両方が使用可能なライフル。

エネルギー・アンブレラ

高性能爆薬による自爆機能が付いているシールド・ビット。

その他IS

白騎士

最初に製造されたIS。

白騎士事件で千冬が使用したが、それを知る者は本人と束のみで、臨海学校で一夏たち専用機持ちの面々にも明かされる。

現在はコアを初期化し解体され、企業などに技術提供の形で公開、第1世代型の開発基盤となった。

その後、研究所に提供されていたコアのみが行方不明になってしまったと思われるが、白式のコアに転用されていることが判明した。

暮桜^{くれざくら}

白騎士に次いで開発され、千冬が公の場で使用したIS。

ほぼ同時期に開発され、単一仕様能力「零落白夜」を備えていた。現在はISコア、機体ともに消息は不明。

無人IS

一夏と鈴のクラス対抗戦にて乱入して来た^{フル・スキン}全身装甲の無人稼動IS。シールドバリアーを破壊するほどの威力を持つ強力なビーム兵器を搭載する。

未登録のコアが使用されていたことや、一夏達との戦闘で機能中枢が修復不可能なほどに破壊されて解析ができなかったことから詳細は明らかにされていない。

条約と規定

アラスカ条約

正式名称は、「IS運用協定」。IS条約とも呼ばれる。

軍事転用が可能になったISの取引などを規制すると同時に、ISの技術を独占的に保有していた日本への情報開示とその共有を定めた協定。IS学園もこの協定に基づいて設置されている。

モンド・グロツソ

21の国と地域が参加して行われるIS同士での対戦の世界大会。格闘部門など様々な競技に分かれ、各国の代表が競うことになる。各部門の優勝者は「ヴァルキリー（Valkyrie）」と呼ばれ、総合優勝者には最強の称号「ブリュンヒルデ」が与えられる。

IS学園関連

クラス対抗戦^{リーグマッチ}

クラス代表を選定し、ISで戦う。

1年1組からは一夏がセシリアから権利を譲り受け出場、1年2組は鈴が元々決まっていたクラス代表から権利を譲り受け出場。

その他のクラス代表は不明。あるアクシデントにより中止となる。

52

ツーマンセルトーナメント（学年別トーナメント）

前回のアクシデントを考慮し、二人一組となりISで戦う。

ある噂が流れていたがアクシデントにより中止となる。

キャノンボール・ファスト

ISを使用し疾走するレース。

安全性が約束されているので妨害などもあり、アクシデントにより中止となる。

事件

白騎士事件

IS発表から1カ月後に起きた事件。

日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキングされ、2000発以上のミサイルが発射されるも、その約半数をIS「白騎士」が迎撃した上、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件。

この時の死者は皆無だった。この事件以降、ISの関心が高まることとなる。

一夏の誘拐事件

第2回モンド・グロツソ決勝戦当日に起きた事件。

幸い、一夏は無傷だったものの、助けに来た千冬は決勝戦出場を棄権し、大きく話題となった（この事件は世間一般には公表されていない）。

主犯として亡国機業が関わっていることが5巻で明らかになった。

その当時、ドイツ軍は独自の情報網から真つ先に彼の居場所を特定し、千冬に伝えた。

この見返りとして、千冬は1年ほどドイツ軍の教官に着任し、ラウラと出会う。

組織・企業

IS学園

アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。

ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。

また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、干渉されない（しかし、全く干渉されないわけではないというのが見て取れる）。

そのため、他国のISとの比較や、新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。

国際IS委員会

国家のIS保有数や動きなどを監視する委員会。
IS条約に基づいて設置された国際機関。
現在の議題は織斑一夏をどの国の所属にするかである。

倉持技研

「白式」の元々の製作・開発室。後付装備の開発もここが担当している。
しかし、白式の特性に加え、白式自体が雪片式型と雪羅以外の後付装備を拒絶しているため未だ専用の後付装備の完成には至っていない。

デユノア社

シャルロットの実家。量産機ISのシェアが世界第3位の大企業。
しかし、設立当初から技術・情報力不足に悩まされ、未だ生産できるISが第2世代止まりであることから経営危機に陥る。
経営危機の回避のための苦肉の策として、シャルロットを男装させ広告塔及び第3世代以降のISのデータ収集のためにIS学園へ送り込む。

シュヴァルツエア・ハーゼ

ドイツのIS配備特殊部隊。通称「黒ウサギ隊」。部隊章は眼帯をした黒ウサギ。

ドイツ国内にある10機のISのうち、3機を保有している名実ともに最強の部隊。

隊長のラウラをはじめ全員が肉眼へのIS用補佐ナノマシン移植者であり、肉眼の保護と部隊の誇りとして眼帯を装着している。

ラウラと部隊員との間にわだかまりがあったが現在は改善されている。

ファントム・タスク
亡国機業

裏の世界で暗躍する秘密結社。第2次世界大戦中に生まれ、50年以上前から活動している。

組織は、運営方針を決める幹部会と実働部隊の二つに分けられる。ただし、組織の目的や存在理由、規模などの詳細が一切不明の謎が多い組織。

IS以外の兵器

リムバー
剥離剤

ISを装着解除させる兵器。効果は強力であるが、欠陥が多い。

一度使用すると装着解除させたISには耐性が付いてしまい、そのISには二度と使用できなくなる。

耐性がつくことでISの遠隔コールを可能にさせる。

クラス代表決定戦 燕vsセシリア（前書き）

バトルシーンがうまく書けないと思いますが、読めるレベルにはなっていると思います。

ちなみに一夏戦は原作とほぼ同じなので省きます
燕は一夏戦を見ておりません

クラス代表決定戦 燕 vs セシリア

第三アリーナ・Aピットで一夏、箒、燕の三名が待っていると

大声を上げながら近づいて来る人がいた

「瞬刀君、今すぐBピットに移動してください！」

「どうしたんですかいきなり!？」

「ISが向こうのピットに届いてしまったんです」

「はあ、仕方ないか、一夏、箒、また後でな！」

燕はそう言い残すとBピットに向かった

Bピット

燕は自分のISを見ていた

「これが、俺のIS…」

『見とれてないで早く乗れ』

ピット内のスピーカーから千冬の声がした

「は、はいっ！」

燕がISに乗り込むと同時に最適化が開始された

「蒼い、IS…」

『機体名、蒼牙、お前のISだ』

「すごく、…なじむ、動きやすい！」

『気分は悪くないか』

「大丈夫です、行ける」

『そうか』

燕はカタパルトまで移動し、出撃した

「…あなたも初期設定のままなのですか？」

「どうした？不機嫌そうだな」

「なんでもありませんわ、さっさと終わりにしましょう」

燕とセシリアが戦闘態勢に入ると試合開始のブザーが鳴り響いた

「くそ、資料で読んで分かってたけど、さすがに刀一振りだときつい！」

「どっしましたの？さっきからよけてばかりではありませんか」

「うるせえー！」

燕はセシリアの挑発に乗ってしまい、燕は急加速をかける

「こつも簡単に口車に乗るなんて」

セシリアはブルーティアーズを射出した

「なにつ、遠隔操作武器！？こんな物に負けるかよ！」

ブルーティアーズを交わしつつ刀で切り裂き、セシリアとの距離を詰めていった

「ここは、俺の間合いだー！」

燕が抜刀術の構えに入ると同時に、ブルーティアーズBTのミサイル射出口が燕に向いていた

「四機だけと思った、あなたの負けですわー！」

燕が緊急回避の体制を取ったときにはもう遅く、ミサイルは燕に直撃した

Aピット

『燕っ！ー！』

一夏と篤が同時に叫ぶと、目の前のモニターに爆炎の中から落ちていく燕がいた

「何やってんだ燕！」

「この一週間の特訓を忘れたのか！」

「そうだ、お前の剣術ならあんな奴楽勝だろ！」

モニターには地面に叩き付けられた燕が写っていた

ミサイルが直撃した

「ぐあっ！」

ミサイルの直撃を喰らった燕はコントロールを失い地面へと落ちていった

「はあ、はあ、くそっ！　　っ！！！」

燕が立ち上がると目の前にはミサイル六機とBT三機が燕を囲っていた

「これで終わりですわー！」

セシリアの声と同時に全弾燕に直撃した

Aピット

「あれじゃひとたまりもねえ」

燕の様子を見ていた一夏が半分諦めた声で喋ったが、モニターに映って写っていたのは

姿の違うISを身につけた燕だった

「……これは」

「また、ですか」

燕はあきれているがセシリアは様子が違った

「なるほどな、これで俺のISになったって訳か
改めてよろしく、蒼牙！」

心に刻み込むように蒼牙の名前を口にした燕は勝負に出た

「織斑一夏といいあなたといい、土壇場で力を発揮しますわね！」

嫌みのように言い放つとミサイルを射出した

「何度も同じ手を喰らうかよっ！」

一機目のBTのようにミサイルを切るとセシリアに向かって特攻を仕掛けた

「はああああ!!」

セシリアはギリギリで燕の一太刀を交わすと上昇した

それを追いかけて燕も上昇し『バリア無効化攻撃』でセシリアを切り裂いた

その瞬間、ブザーが鳴り響いた

クラス代表決定戦 燕vsセシリア(後書き)

長かったですよね、ごめんなさい
次はいつ投稿出来るか分かりません

専用機紹介（前書き）

人物紹介から切り離れたやつです
少々改良してあります

ネタバレ覚悟の人だけ読んでください

専用機紹介

燕専用機

蒼牙そつが

第四世代機

束が白式の後に送ってきた専用機

形状は白式に似ているが、細部が所々違う形状になっている
待機中は一夏と同じくブレスレットになる

誰にも知らされていないが

本機は白式の後継機であり、紅椿のテスト機でもある

機体・ブレスレットカラーは紺色

蒼天月そつてんげつ

セカンド・シフト

第二形態移行した蒼牙の名称

機体カラーは蒼牙と同じく蒼いカラーリング

燕は略して天月てんげつと呼んでいる

ウイングスラスタが、(フリーダム)のバインダー翼になり(直
接装甲に着いている)

未完成ながら展開装甲も備わっており エネルギー切れが起きない
という事はないが

普通のISの二倍の稼働時間を得る

蒼天月のスペックは紅椿よりも若干高めになっている

武器

刻焰こくえん

雪片式型の兄弟刀(形は『ボーダー○レイク』のLM・ジリオス
と同じ、

展開した時にニュード色の刃が表れる)

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力は『天破蒼炎』

白式の『零落白夜』以上の力を発揮するが
使用者に相当な負荷をかけるのが弱点

すいげつ
水月

セカンド・シフト
第二形態移行したときに使用可能になる装備

形状は小刀をイメージさせる。

空裂と同じく、斬撃そのものをエネルギー刃として放出することが出来る

げっこう
月光

セカンド・シフト
第二形態移行したときに使用可能になる装備

形状は刀に近いが、銃としての機能も搭載されている。

セイバーモードとガンモードを使い分けることで、近・中・遠、どの距離でも対応が可能になっている

この剣で単一仕様能力を発動すると、蒼いオーラみたいなものが刃を覆う

バインダー翼

セカンド・シフト
第二形態移行したときにウイングスラストが変化した装備

背部ウイング内に計2門装備された高出力レールガンを搭載されているが、

出力が高すぎるためエネルギー消費が激しい

この翼には10枚のウイングを広角展開することで

「ハイマツトモード」と呼ばれる高機動空戦形態を取ることが出来る
このモードは滅多に使用しないが使用時には紅椿でさえ追い付くこと

との出来ない
スピードを発揮する

一夏専用機

白式びやくしき

第四世代機

色々謎の多い機体

待機中はブレスレットとなる

機体カラー・ブレスレットカラーは白

白式・雪羅びやくしきゆわ

第二形態移行した白式の名称

左手への多機能武装腕『雪羅』の発現と大型化したウイングスラスターが4機備わっている

武器

雪片式型ゆきひらがたがや

刀剣の形をした、近接戦闘用の武装で白式の主力武装

単一仕様能力は『零落白夜』れいらくひやくや

自身のシールドエネルギーを消費して稼動するため、使用するほど自身も危機に陥ってしまう諸刃の剣でもある

雪羅ゆわ

白式自らが作り出したエネルギー武器

展開装甲の機能も持っているのか射撃・格闘・防御を全てカバーすることができる

射撃用に大出力の荷電粒子砲、

格闘用に零落白夜のエネルギー爪、

防御用として零落白夜のバリアシールドを展開可能

筭専用機

あかつはき
紅椿

第四世代機

白式と蒼牙の対となる機体

待機中は金と銀の鈴が一对になってついている赤い紐
機体カラー・紐カラーは紅

武器

あまつき
雨月・空裂

刀剣の形をした紅椿の主力武装。

雨月は刺突攻撃の際にレーザーを放出し

空裂は斬撃そのものをエネルギー刃として放出することが出来る

けんらんぶどう
絢爛舞踏

エネルギーを増幅する事ができる紅椿の単一仕様能力ワンオフ・アビリティ

使用時には展開装甲から黄金色の粒子を放出して金色に輝く

紅椿の高性能さはこのアビリティの使用を前提にしているため、
発動していないときはすぐにガス欠を起こす（完全に操れるようにならばエネルギー切れは起きない）

セシリア専用機

ブルー・ティアーズ（蒼い雫）

第三世代機

射撃を主体とした機体

待機中は青いイヤーカーパス

武器

スターライトmkIII

主力武装である巨大な特殊レーザーライフル

ブルー・ティアーズ

ビット型の射撃武器

インターセプター

接近戦用のショートブレード

強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』（主に特殊任務のみ使用）

全長2メートルのレーザーライフル『スターダスト・シューター』

超高感度ハイパーセンサー『ブリリアント・クリアランス』

ロングライフル『ブルー・ピアス』を装備している

鈴音専用機

甲龍（シェンロン/こうりゅう）

第三代機

燃費と安定性を第一に設計されている

待機中はブレスレット

武器

双天牙月

そつてんがげつ

大型の青龍刀

砲
ウチウチ

衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲

機能増幅パッケージ『崩山』^{ほうざん}（主に特殊任務のみ使用）
拡散衝撃砲に変化

高速機動パッケージ『風』^{フエ}（主に特殊任務のみ使用）
胸部に衝角状の追加装甲を搭載するキャノンボール・ファスト仕様のパッケージ

シャルロット専用機

ラファール・リヴァイヴ・カスタムEE

第二世代機

ラファール・リヴァイヴのカスタム機

待機中は十字のマークのついたネックレス・トップ

武器

近接ブレード『ブレッド・スライサー』

連装ショットガン『レイン・オブ・サタデー』

アサルトカノン『ガラム』

ラビット・スイッチ
高速切替

灰色の鱗殻
グレー・スケール

シールドの裏に装備されている69口径のパイルバンカー。通称・

盾殺し（シールド・ピアース）

防御パッケージ『ガーデン・カーテン』（主に特殊任務のみ使用）
実体シールド2枚、エネルギーシールド2枚により防御機能を向上
させる

キャノンボール・ファスト仕様として、左右の肩と背部に1基ずつ
増設スラスタを装備している

ラウラ専用機

シュヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）

第三世代機

A I Cと呼ばれる機能を搭載する機体
待機中は黒いレッグバンド

武器

A I C（慣性停止結界）

アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略

V Tシステム（ある事件以降は破棄される）

ヴァルキユリー
Valkyrie トレース T r a s e システム S y s t e mの略

ヴォーダン・オージエ（越界の瞳）

ラウラの瞳に移植された、疑似ハイパーセンサー

砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』（主に特殊任務のみ
使用）

レールカノン『ブリッツ』を両肩に2門装備

遠距離からの砲撃・狙撃対策として2枚の物理シールドを左右、正面に展開する

クラス代表決定祝い

「すごかったぞ燕」

「うむ、最後の太刀筋は今までよりも最高だったぞ」

ピットに戻った燕は一夏と篤に戦闘の感想を言われていた

「それにしてもBTのフル射撃から良く生き延びたよな」

「一夏、お前の目では俺は死んだように見えたのか…」

「いや、あれは誰が見ても死んだと思えるくらいにすごかったぞ」

燕と一夏が話をしていると千冬と山田先生がこちらへ歩いてくるのが見えた

「良くやったな瞬刀、だがまだまだだな」

「瞬刀君、これが君のISの待機状態です」

山田先生が燕に渡したのはブレスレット状態の蒼牙だった

それから放課後になりクラスのみんなで代表決定祝いをする事となった

「クラス代表おめでとう、織斑君」

「さっすが男の子」

「せつかく男子が居るのもつたいないよね」

「なあ、何で俺がクラス代表になってるんだ？」

「俺が一夏戦を放棄したから」

「わたくしが一夏さんに代表の座を譲ったからですわ」

「なんで!？」

「めんどくさいから」

「どう考えてもわたくしが勝のは当然の事、少々大人げないと思っ
たからですわ」

一夏は少しいやそつな顔をすると諦めたようにため息をついた

「そついえば瞬刀君は副代表だったよね」

「はあ!？そんなの初耳だぞ！」

「え、聞いてないの？」

「マジでか？」

その後、写真を撮ったり、他の生徒からの質問攻めを燕と一夏は喰
らっていた

その姿を見ていた篤はパーティーが終わってもしばらくイラついて
いた

そして22:00になろうとしていた頃、燕の部屋に篤が訪れた

「……………」

「……………」

「…なあ、一体何があったんだ？」

「どうも部屋にいるとむしゃくしゃしてな」

「それで俺の部屋に来たと」

「そうなのだが、ここに来ててもむしゃくしゃが止まらないのだ」

「それは何か、俺にも非があったと言うことか？」

「……………そうかもしれんな」

「まあいいのかわからないが、俺は寝るからそろそろ部屋に戻ってくれないか？」

「ん？今日は燕の部屋に泊めてもらうつもりで来たのだが」

「は？今何と」

「だから、今日は泊めてもらうつと」

「一夏には話したのかよ！」

「書き置きを残しておいた」

「先生はどうするんだよ！」

「バレなければ問題ない」

「……………」

「……………」

「はあ、分かったよ。今日だけだからな」

「うむ、助かるぞ燕」

それからしばらくして二人は布団に入った

(…やべえ、ぜんぜん眠れねえ、昔は兄妹みたいなものだったからな、こんな気持ちは初めてだ

一夏はこんな空間で寝ているのか)

(なぜだ、全く眠れない、もう兄妹みたいな関係ではないと言っ
とか？一夏だと問題ないのだが
やはり慣れの問題か?)

二人は同じような事を考えながら、結局深夜まで眠れなかった

クラス代表決定祝い（後書き）

今回は短くてすみません

久しぶりの実家（前書き）

番外編ではありません、あしからず

久しぶりの実家

燕は今、町を歩いている

久しぶりに実家へ帰ると言うことだ

最初は一夏と筍も一緒に行くと言っていたが燕がそれを拒否し

千冬の協力があつてなんとか二人を説得できた

ちなみに昨晚の出来事はまだ誰にもばれてはいない

「いい天気だなあ」

燕は久しぶりに外へ出たので、あの女子だらけの空間からの開放感で満ちあふれていた

「さてと、家に帰ったら何するかな？」

久しぶりの家と言うことで少しテンションがあがっている燕に後ろから声をかける者がいた

「久しぶり、ツバ兄にい!!」

「うおっ!?!」

声をかけられたので後ろを振り向いた瞬間、小さな何か燕に向かって飛びついてきた

「ツバ兄、会いたかったよ」

「ちよつ、はなせ光！」

燕に抱きついた少女の名前は『三上^{みかみ}光^{ひかり}』詳しいことは人物紹介で

「久しぶりなんだからいいでしょ」

「こんなところで抱きつくなど言っているんだ」

「ならツバ兄の家ならいいの？」

「それでもダメだ」

燕は光を少々強引に引っぺがす

「うっ」

「唸ってもダメ」

「いじわる!」

それから何度か用事があると言って、光と別れようとしたが

片っ端から失敗してしまい、最終的には瞬刀家まで着いてきてしまった

それからしばらく燕は目的の物を探していた

「ツバ兄、何探してるの？」

「ああ、昔親父にもらった物をな」

「へへ、ねえ、それって何なの？」

「『ペンダント』だ」

「誰かにあげるの？」

「バーカ、形見だぞ。人にやるもんじゃねえよ」

燕が探し始めて二時間、ようやく目的の物を見つけて家を出た

「そう言えば一兄いちごうと篤姉あつねえは？」

「あの二人ならたぶん学校にいると思うぞ」

「たぶん？」

「ああ、今日はちょっと一人になりたかったんだ。

それなのに光が着いてきたからな、一人になれなかったよ」

「だって久しぶりに会ったんだよ、良いじゃない」

「ま、いいか」

それから少し話をした後に光を家へと送り届けIS学園へと戻った

久しぶりの実家（後書き）

次回もお楽しみに！

セカンド幼なじみの到来！？

クラス代表決定戦が終わり数日

この日の授業はグラウンドで、簡単な飛行操縦の実践らしい

「それではこれより、飛行操縦の実践をしてもらおう。
織斑、瞬刀、オルコット。試しに飛んでみる」

鬼教官こと千冬姉が俺たち三人に指示を出す

それに対し俺たちはISを展開する

が、しかし、一夏だけが展開に手こずっていた

「どうした、早くしろ織斑」

「は、はい！」

一夏は集中し、白式を起動させる

「よし、では飛べ！」

その合図と共に、セシリアが先陣を切って急上昇した

続いて燕が、そして最後に一夏が飛び立った

しばらくの間、グラウンドの上空を旋回しているが

「夏がどんどん置いて行かれる」

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

「そんなこと言われてもなあ、自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ？」

「どうも感覚がつかめないんだよな」

「夏のぼやきにセシリアが個人間秘匿通信で答える」

「イメージは所詮イメージ、自分が一番やりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「空を飛ぶイメージって何だよ、燕はどんなイメージ使ってた？」

「俺か？俺は背中に翼があるイメージだな」

「背中に翼か、なるほど」

「でも一夏なら、背中にジェットエンジンで良いんじゃないか？」

「ああ、その手もあるな」

二人で話していると、突然横からセシリアが、話に割り込んできた。

「あの、もし良ければ放課後にわたくしが指導して」

「織斑、瞬刀、オルコット、急降下と完全停止をして見せる。」

「目標は地表から十センチだ」

セシリアの話の途中で千冬姉が次の課題を提示してきた

「了解です。ではお二人とも、お先に」

そう言い残すとセシリアは急降下し地表十センチのところまで完全停止した

「うまいもんだなあ」

「さすがは代表候補生、次は俺が行くぜ！」

「あ、おい！」

燕は一夏の言葉を聞かぬまま急降下し、目標よりも若干低い位置で停止した

「なかなかやりますわね」

「いやいや、お前に比べたら俺なんか」

「退いてくれ〜!!」

燕が謙遜していると不意に上から叫び声が出た

燕は驚くのと同時に、上空へ意識を向けると一夏がものすごいスピードで

こちらに突っ込んできた

ギョーンッ

ズドオオンッ!!

轟音と共にグラウンドに巨大なクレーターができあがった

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った」

「……すみません」

「一夏、退いてくれないか?…身動きが取れん」

燕は回避が間に合わず（むしろ燕めがけて突っ込んできた）一夏の墜落に巻き込まれていた

「あ、ああ、悪い」

一夏と燕が体を起こし一息ついたところで（全然休めなかったけど）授業終了のチャイムがなる

そしてその日の夕方、ポストンバックを背負った少女がIS学園に訪れていた

そして次の日の朝、教室では二組に来た転校生の話で盛り上がっていた

「ねえねえ聞いた?二組に転校生が来たって言う話」

一人の生徒が一夏と燕に転校生の話題を持ち出してきた

「いや、知らねえな。どんな奴なんだ？」

「たしか中国の代表候補生のはずだよ」

燕の質問に優しく答えてくれた少女だが、燕の心境は穏やかではなかった

(中国？代表候補生？…中国、中国、……なにか、いやな予感がする)

燕は中国と聞いた時に、一人の少女が浮かび上がっていた

(どうか予感が外れてくれ)

昔の事を思い出しながら冷や汗を流す燕を誰も見てはいなかった

「なあ燕、たしか代表者で専用機持つてるのはここと四組だけだったよな」

燕は何とか平常心を取り戻し、一夏の質問に答える

「ああ、そのはずだが」

「その情報、古いよ」

不意に入り口から声がしたのと同時に燕の姿が消えた

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、片膝を抱えてドアにもたれていたのは

「鈴………？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

少し腕を上げ、振り下ろすように一夏を指さす

その動作のせいで、トレンドマークのツイントールが左右に揺れる

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなつ！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

おお、ようやく普通に喋ったぞ

「おい」

「なによっ！？」

バシッ！千冬姉の出席簿アタックが鈴に炸裂した

「もうSHRの時間だ、そこをどけ邪魔だ、そしてお前は教室へ戻れ」

「…す、すみません」

鈴はすくすくことドアから離れ、去り際に

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

そついい残し、鈴は教室へ帰っていった

「それではSHRを始めるが、……瞬刀、お前は机の下で何をしている」

「…かくれんぼ、だと思えます？」

バシッ！燕に鈴の時よりも強い一撃が入った

その後、箒、セシリア、燕の三名は授業に身が入らず、

何度も注意を受け、または出席簿アタックを喰らうという悲惨な事になっていた

そして昼休みとなり、食堂へ向かった

セカンド幼なじみの到来！？（後書き）

ようやく一人目の転校生、凰鈴音が登場しました
今後の展開もよろしく！

幼なじみ達？の昼食と特訓後！？（前書き）

宣告通りの更新ができて良かった

幼なじみ達？の昼食と特訓後！？

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

そういい残し、鈴は教室へ帰っていった

「それではSHRを始めるが、……瞬刀、お前は机の下で何をしている」

「……かくれんぼ、だと思えます？」

バシッ！燕に鈴の時よりも強い一撃が入った

その後、篝、セシリア、燕の三名は授業に身が入らず、何度も注意を受け、または出席簿アタックを喰らうという悲惨な事になっていた

そして昼休みとなり、食堂へ向かった

食堂へ着くなり俺たちを待っていたのは鈴だった

「待ってたわよ、あんた達！」

その声を聞いた瞬間燕は、そろりそろりと購買の方へ逃げ始めた

だが、その行動は鈴に肩をつかまれ失敗に終わった

「燕、どこへ行くつもりしてるの？」

「えっと、購買でパンとカフェオレでも買おうかな〜って」

「ここで食べたら？」

「いや、パンが良いな〜って」

「ここで！食べたら？」

鈴の（殺気はこもっていないが）気迫に負け、燕は渋々食堂で食べることとなった

「はあ〜」

「諦める燕、これも運命だ」

「…お前にだけは言われたくねえ」

「なんだと!」

そんな燕と一夏の会話を無視して、箒とセシリアは隣のテーブルへ座った

食事が終了間近になった時、鈴が口を開いた

「ねえ燕、いつ帰ってきたの？」

「中三の時に戻ってきて、一夏と同じ学校に通ってたぞ」

「あたしと入れ違いかあ」

「そういえば燕の引越しの時、鈴大泣きしてたなあ」

「ちよつ、昔のことはどうでも良いじゃない！」

「あの時は鈴に抱きつかれて動けなかったなあ」

「あんたまでえ」

「まあ良いじゃないか」

「そうそう、昔を振り返るのは悪い事じゃない」

鈴は唸りを上げ黙り込んでしまふ、そしてその沈黙を破ったのはまたしても一夏だった

「ところで鈴は、いつ日本にっぽんに帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「一気に質問しないでよ。アンタ達こそ、なにIS使ってるのよ。ニュースで見たときビックリしたじゃない」

一夏は丸一年、燕は丸三年ぶりの再会ということもあって、三人間で質問が飛び交っていた

そんな中、篝とセシリアが話しかけてきた

「一夏、燕、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！まさかこちらの方と付き合っているんじゃないの！？」

少々棘のある口調で筈とセシリアが質問してきた。

セシリアの質問には興味があるのか、周りの女子達もこっちに耳を傾けている

そして鈴と言えば

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ」

と、こんな感じだ。そして一夏の勘違いスキルが発動

さっきの話をしていれば付き合っているっつうのは俺に来るはずなのだが

「そうですね。何でそんな話になるんだ？ただの幼なじみだぞ」

「……………」

「何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

あゝあ、一夏のやつやっぱりわかってねえな。

まあ、付き合っていないのは本当だがな

……………そういえば昨日部屋にいたやつって、…まさかな

「幼なじみ……？」

「そうか、箒は初めて会ったな。鈴は小五の頭に転校してきたんだよ。」

で、中学に入る前に燕が転校していった。

その後の中二の時に鈴が転校、入れ違いに燕が帰ってきたんだ」

一夏の話に続くように燕も口を開く

「鈴、前に通ってた剣術道場の娘の話をしただろ。ここにいる箒が
そうだ」

「ふう〜ん、そうなんだ」

鈴はジロジロと箒を見始めた

「初めまして、これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言っただけ挨拶を交わしているが燕と一夏の目にはなぜか二人の間に火花が見えていた

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ！」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候」

「ああ、ごめん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ!?!」

何も言えなくなったセシリアを放って一夏と燕に話を振ってきた

「あんた達、クラス代表と副代表になっただったって?」

「お、おう、成り行きでな」

「俺は面倒なのは勘弁してほしいんだがな」

「あ、あのさあ。ISの操縦、あたしが見てあげてもいいけど?」

あれ?顔は一夏に向いてるけど視線がこっちだよなあ

「そりゃ助か」

ダンツ!つと箒とセシリアがいきなりテーブルを叩いた

「一夏と燕に教えるのは私の役目だ。二人がどうしても頼んでき
たからな」

ちよつと待て箒!一夏はともかく俺は頼んでないぞ!!

「あなたは二組でしょう!?!敵の施しは受けませんわ」

「それにこの二人とは何度もうちで食事をしている間柄だ」

「それならあたしもそうだけど?」

「なにっ、どついうことだ！？聞いてないぞ！」

「わたくしもですわ！」

二人そろってこちらを睨んできている。鈴はなんだか得意げな顔をしているたが、しかし

「説明もなにも、鈴の実家の中華料理屋に行つてただけだ」

（まったく一夏は、さっきまで余裕の表情だったのにいきなりムスツとした表情になったぞ）

「な、何？店なのか」

「あら、そうでしたの」

二人が思いつきり表情に出しながらほつとする

「おじさん、元気にしてるか？」

「あ……。うん、元気だと思う」

（だと思つ？なにかあったのか）

「それよりも放課後開いてる？」

鈴の質問に燕が答えようとするが、箒がそれを阻んだ

「あいにくだが、一夏と燕は私とISの特訓をするのだ。放課後は

埋まっている」

「じゃあそれが終わったら行くから、時間開けといてね」

そう言い残し、鈴は食堂を後にした

放課後になり、俺と一夏は第三アリーナへ向かい、そこで見たのは打鉄姿の箒だった

箒曰く『今日からこれで特訓に付き合う』らしい

その後、箒とセシリアの鬼畜的な特訓をくらい、燕と一夏は精神と肉体共にぼろぼろとなった

箒とセシリアの特訓が終了し、燕は自室へ向かっていた

「ふあっああ、疲れたあ」

そう言い燕は、扉を開けすぐに閉めた

「……気のせい、なのか？」

気のせいと自分に言い聞かせ、再び部屋の扉を開け、そこにいたのは

「……すう……すう」

燕が普段使用している壁際ベッドで眠る鈴だった

「………なんで鈴が俺のベッドで寝てるんだよ」

燕はどろりして良いのかわからず、部屋の中で突っ立ったままだった

とてつもなく長い夜

「……………」

「…………すう…………すう」

その日の練習を終え、燕が部屋に戻ると、そこには鈴がいた

いや、居たという表現はちょっと違うな

寝ていたという表現が正しい

「さて、この状況をどうしたものか…」

【燕の脳内選択肢】

1 () 構わず隣のベッドで寝る

2 () 寝袋を持って一夏達の部屋へ向かう

3 () ……襲う

いやいやいや、最後の選択肢は無いだろ!!!!

むしろやった時点で犯罪だよ!!!!やる気もねえよ!!!!

【燕の脳内選択肢・改】

1 () 構わず隣のベッドで寝る

2) 寝袋を持って一夏達の部屋へ向かう

3) とりあえず鈴を起こして事情を聞く

うぐん、やっぱり三番か

まあ、妥当なところだろうな

「おい鈴、起きろ！」

燕は寝ている鈴の肩を軽くたたいて起こそうとするが、なかなか起きないのであきらめることにし、渋々隣のベッドで寝ることにした

それから何時間経っただろうか、外はすでに真っ暗闇で静まり返っている

燕が気持ちよく寝ていると急に腕あたりに重みを感じ、目が覚めてしまった

「んん、なんだあ？」

燕は眠たい目をこすりながら腕のほうに視線を動かす

「なっ！？」

燕が見たものは、燕の腕に抱きつき気持ちよく寝ている鈴だった

「ななな、なんで鈴がこっちのベッドに!!!!?」

燕の思考は一気に回復し、フル回転させる

やはりここは鈴を起こすか?それともベランダで寝るか、さすがに
一夏達も寝てるからな、こんな時間に起こすのも悪いからな

「さて、寝袋はどこだったかな?!!……さてどうしたものか」

燕は寝袋を取りに行こうとしたが、寝ぼけている鈴が腰に抱きついてきて身動きが取れなくなってしまった

「……すう……すう」

「まったく、気持ちよさそうに寝やがって、こっちは大変だったのに
すでに次の行動をどうするかなど、燕の頭にはなかった。

その理由は、小学校の時に行ったキャンプのことを思い出していた
ためだ

「まったく、キャンプの時も俺に抱きついてきたっけ」

燕と一夏がテントで寝ていると、急に燕の背中に何か当たってきた

「ん？なんだ鈴か、……まあいいか」

燕は気にせず、再び眠りについた

「……あの時は良かったかもしれないが、今はまずいだろ」

燕は何とか鈴の腕をどけようと試みるが、がっしりと掴まれているためビクともしない

「はあ、本当にどうすればいいんだよ。……うわあっ！！？」

どうしたものかと考えていると、鈴が腰から肩に腕を回してきた

その結果、燕は押し倒されるような形になってしまった

「おい鈴、起きろ！！起きてくれ！！」

燕の叫び、もとい心からの願いは、残念ながら鈴には届かなかった

「くそ、どうしようもないな」

燕は諦めて眠りに付こうとするが、鈴が抱きついていているうえ寝息まで聞こえてしまうので、気が散って仕方がなかった

「だあー！くそつ、眠れねえ！！」

燕は頭を抱え、再びどうやって抜け出そうかを考え始める

ちなみに鈴の頭は燕の肩にくっついてる

「眠りたい、だけど眠れない、…どう考えても抜け出せる案が思いつかない」

それからしばらく考えたものの、いい案が思いつかず諦めるしかないという結論に達してしまった

「帰ってきつと思ったら早速これだもんなあ、だから避けてたのに」

燕は考えるのを止め、昔の出来事を思い出しながら自然に眠りにつくのを待つことにした

気が付くと、闇を消す光が表れ始めた

結局のところ、燕は眠りに付くことが出来なかった

「もう朝か、今何時だ？」

燕は頭だけを動かし、時計を見る

表示されている時間は『05:17』だった

「あと四十三分。いや、三十三分か」

燕は朝の鍛練、すなわち箒がこの部屋へ訪れる時間を図った

「まずいな、もう時間がない、……ちょっと待てよ、今日は学校は休みだったよな。休みの日の鍛練は三十分早いんじゃないか？」

そう、箒との鍛練は基本朝六時からだが、休みの日になると三十分早くなる

「残り十分弱……おい鈴、起きろ！！起きてくれ頼む、俺の命が危ない！！」

燕は必死に鈴を起こしにかかるが、やはり効果は無く、次の手段を考えようとすると

誰かが部屋のドアをノックしてきた

「おい燕、うるさいぞ。しかし起きているのならちよつどいい、鍛練の準備を手伝ってくれ」

箒の言葉を聞いた燕の頭には死の言葉しか浮かんでいなかった

生死を賭けた選択肢！？（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません

部活などが忙しく、小説を書く時間がありませんでした（たまたま口グインはしてたけど…）

生死を賭けた選択肢!?

「おい燕、うるさいぞ。しかし起きているのならちよつどいい、鍛練の準備を手伝ってくれ」

箒の言葉を聞いた燕の頭には死の言葉しか浮かんでいなかった

不味い、これ以上になく俺の命がやばい。

どうする、ここで箒に見つかれば死は確実だろう。

「燕?聞いているのか、入るぞ」

ふっ、俺に抜かりなどない!

昨夜この部屋に入った時に、すでに鍵は

ガチャリ

.....なぜ?

なぜだ、なぜ俺の部屋のカギを箒が持っているんだ。

...まさかっ!

以前俺の部屋に泊まりに来たときに合鍵でも作ったのか!?

「燕、居ないのか?」

不味い、このままでは！

ええい！くそっ！！

燕は鈴を抱え込むとそのままベッドの反対側へと飛び降りた

「な、なんだ？ 箒」

「なんだじゃない、朝から騒がしいぞ。なにがあつた？」

燕はベッドの端から肩までを出している状態だった。

「ああ、ちょっと中学の頃の友達と口論になっただけだ。気にしないでくれ」

「そうだったのか」

よし、このまま乗り切れば！

「鍛練の時間まで少し時間があるが、準備を手伝ってくれないか？」

「そんなことならお安い御用だ。先に行つててくれ」

「いや、お前の支度が済むまでここで待たせてもらつ」

……えっ？

箒さん。今なんと申しましたか？

支度が済むまでここで待たせてもらつ？

支度も何も、鈴をどうにかしないと俺はここから動けないんですが！？

「支度に少し時間がかかるから、待たなくていいぞ」

これでどうだ？

「いや、待つのは慣れているからな。大丈夫だ」

くっそー。これでもダメか！！

次の手を考えるんだ俺っ！

「いやさあ、先に行って準備を始めておいてくれないか？」

「なぜだ」

そんな睨まなくてもいいだろうに…

「一緒に行って準備を始めるより、先に準備始めたほうが効率がいいだろ」

「むっ、…それもそうだな。なら先に行くがすぐに来るんだぞ」

「分かってるよ。そんじゃまたあとでな」

何とか箒を先に行かせることに成功した燕は当初の問題について考えていた

箒の方は何とかあったが、問題は鈴なんだよな

「……すう……すう」

現在鈴は、俺の膝の上で寝ている。俗にいう膝枕というやつだ

「はあ、何とかならないもんかねえ」

燕は何か鈴をはがそうとするが、腕をしっかりと持たれているので身動きが取れない

「おい鈴、起きろ朝だぞ」

そついいながら鈴の体を揺さぶるが反応がない

くそつ、ほかに手はないのか！

「……うん、……うん？おはよう燕」

起きた！やったぞ、俺の命は救われたんだあ！！

「おはよう、早速で悪いがそこどいてくれ」

鈴は寝ぼけながらも、自分の置かれた状況を把握しようとする

「なんで燕の上で寝てるの、あたし」

「それは話すと長くなるからまたあとでな」

そう言うと燕は剣道着に着替え、部屋を後にした

「急がねえと筈の奴が」

俺を殺しにかかる！

その後何とか間に合い、死を間のがれた燕だが
鈴からの質問攻めで、ロクに休憩が取れなかった休日になってしま
った

生死を賭けた選択肢！？（後書き）

次もいつ更新できるかわかりませんが、次回もお楽しみに！

ようやくクラス対抗戦だぁ！！

ゴーレム？との対戦をどう表現するか試行錯誤中です！！

オリキャラ説明（瞬刀編）（前書き）

次の話までのつなぎです。無視しても構いません

オリキャラ説明（瞬刀編）

名前

瞬刀 燕しゅんとう つばき

年齢

16歳

性別

男性

生年月日

5月20日

血液型

B型

身長 ・ 体重

169cm ・ 54kg

目の色

琥珀色

髪型 ・ 髪の色

ボサツとしたショート ・ 紺色

戦闘スタイル

イグニツションブーストを利用した。近接格闘戦

備考

中学では授業をさぼる癖があったが、IS学園に入ってからというもののサボり癖はなくなった

一夏・箒・鈴とは小学時代からの幼馴染で、普段から一夏の天然さに振り回されていた

燕の両親は中二の冬に事故で亡くなっており、三年に上がると同時に、織斑家へ居候することになった

なお、燕の家はまだ残されており、ちよくちよく実家の方へ戻るともある

クラス対抗戦に現れる謎の物体！（前書き）

どうもお久しぶりです。

約二か月という期間ほったらかしでしたが、連載を再開させたいと思います。

いつもの通り短いですが、楽しんでいってください。

クラス対抗戦に現れる謎の物体！

第二アリーナ ピット内

「すまん一夏、俺が余計な事をしたから！」

突然燕が俺に謝ってきたんだが、俺は何もされてないぞ！？

「俺が昨日、鈴が大事に取っておいたゼリーを食ってしまったから、今日の対抗戦で憂さ晴らしをするそうだ」

間接的に迷惑をかけて来やがった！！？

「ちょっと待ってくれ燕、詳しく聞かせてくれ」

「ああ、話すとても短いが、」

「短いのかよ！」

〈前日の燕の部屋〉

「腹減った、なんか食いもんねえかな？」

燕は部屋にある小さい冷蔵庫を覗き、少し中をあさり始めた

「おっ！ゼリーがあるじゃん、これで夕食まで保つな」

ゼリーを食べ終わりネットで遊んでいると、鈴が戻ってきた

「ただいま、ん？ああー！！」

「どうした？」

「燕、このゼリーって」

「ああ、冷蔵庫に入ってた」

「これはあたしのよ！楽しみにしてたのに、なんて事してくれんのよー！！」

「てな訳でしばらく言い合いが続き、最終的に一夏に八つ当たりしようという結果に達したらしい」

「そこでなんで俺が出てくるんだよー！」

「さあ？」

「さあ？じゃないだろー！」

「まあまあ、死ぬなよ一夏」

「誰のせいだ！」

「そうそう、俺はアリーナの外にいるから」

「見ていかないのか？」

「俺が観客席に居ると、鈴の怒りが高まるぞ」

「…それもそうだな」

「じゃあな、勝てよ一夏！」

「もちろん！」

そう言い残し、燕は外へ出て行った。そして

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

はかったかのように、アナウンスが入る

一夏は空中へ行き、鈴と向かいあう

「一夏、燕に何でも言うつことを聞かせるように説得させるの手伝ってくれたら、痛めつけるレベルを下げて上げるけど？」

「燕の事は自分で何とかしろよ」

「あっそ、じゃあ本気で行くよ」

「俺もだ」

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーッと鳴り響くブザー、それが切れると同時に一夏と鈴が動く

ガギイン！！

一夏の 雪片式型 と鈴の 双天牙月 が激しくぶつかり合う

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

鈴は二つの青竜刀を連結させ、バトンのように回し

一夏に斬りつける

「まずい。このままじゃ消耗戦になるだけだ。一度距離を取って」

「甘いつ！」

一夏が距離を取ろうとした瞬間、鈴の肩アーマーがスライドして開く。

中心の球体が光った瞬間、目に見えない衝撃に一夏は吹き飛ばされる。

「今のはジャブだからね」

鈴は狙いを定め、本命を放った

「ぐあっ！」

直撃を喰らった一夏は、シールドバリアを貫通して届いたダメージに襲われた

「さて、何をするかなあ？」

アリーナを出た燕は、近くの河原で寝そべっていた

「ん？何だあの光」

燕は空に光る、謎の物体をハイパーセンサーで確認した。そこに写っていたのは

「なっ！あんなの見たことねえぞ、早くアリーナに！」

燕は飛び起き、急いでアリーナへと戻っていった

「よくかわすじゃない。衝撃砲 龍砲 は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

直撃を喰らった一夏は、回避しか取れない状況になっていた

（ハイパーセンサーに空間の歪み値と大気の流れを探らせているが、これじゃ遅い。撃たれてからわかっているようなもんだ。どこかで手を打たないと…）

一夏が鈴の隙を窺っていると、急に強い衝撃の音と共に目の前に一本のビームと一つの影が二人の間を通り抜けた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8946r/>

IS《インフィニット・ストラトス》～蒼き閃光の覇者～

2011年11月16日14時04分発行